

平成6年度修士論文要旨

ゲオルク・ハイム 試論

——その「日記」を中心に——

赤 沼 武 志

ゲオルク・ハイム (Georg Heym, 1887-1912) はドイツ表現主義時代のごく初期に登場し、僅かな創作期間に、主にその活動の舞台である大都会ベルリンをテーマにとった様々な作品を残した夭折詩人として知られ、とりわけその詩におけるグロテスクな描写によって、表現主義文学の先駆的存在の一人と位置付けられている。そしてその作風に関しては、その詩のもつ幻想的で破壊的なイメージが大きくクローズアップされる傾向が強い。彼が第一次世界大戦の開戦以前に活躍し、ほどなく事故死した事実も影響しているだろう。だがハイムの作品を読むにあたって、たとえば彼の詩における暗い都会のイメージが、あるいはその短編における狂人たちの姿が暗示するものは幅広く解釈されてよいはずである。その幅広い解釈のために彼の「日記」を主要テキストに用い、その観念世界の発展・変化を見ることによって、この詩人の創作のモチーフについて考察するのが本稿の目指すところである。

ハイムの短い生涯は、幾度か転居を経験する毎にそれぞれの局面を呈している。ベルリンで少年時代を過ごしたハイムはギムナジウムで不祥事を起こして放校処分になり、ノイルッピンという小都市へ移る。同時期に書かれた詩にはロマン主義的傾向がはっきりと見られ、片田舎の自然に心酔しつつ、日記には自分の運命を嘆く記述が目立つ。ノイルッピンのギムナージウム内外での生活は彼にとって「青春の地下牢」であって、この時期に両親、学校の教師に対する反感は強まるが、彼の日記には嘆きばかりが羅列されているのではない。初期の日記で最も目を引くのは、ハイムが

心を寄せる数十人に及ぶ少女達の名前である。彼女達との自然の中でのロマンティックな逢瀬は日記の上での幻想にすぎず、叶うことのない愛を創作のエネルギーへと昇華させる術は、この時期に身についたと思われる。

また、この頃のハイムは死についてごく身近に考えるようになる。不如意な現実世界と詩人自らが描き出すイメージとの隔差はその人生観をさらに厭世的なものにはするものの、詩を書くという行為において、彼は架空の死を体験し、それを繰り返すことでいつしか実際の死からは一線を画すことが出来るようになったのである。

日記の記述から、ハイムが自分の容姿にコンプレックスをもっていたことが推察されるが、彼の場合このことが「美しさ」への盲目的な追従にながらず、むしろその対極の「醜いもの」の意識へと「発展」することに注目したい。ハイムにとって美と醜の対立関係は人知の及ばぬ神性に拘わることであるが、自分に美を授けなかった神は信ずるに及ばない存在と思えたのは当然かも知れない。ハイムの無神論的姿勢はすでにこの頃には歴然としているのである。

ノイルッピンの「地下牢」を脱出し、法律を学ぶべくヴェルツブルクへ移ったハイムには、まだその文学的素養を萌芽させる環境は用意されていない。だが不本意にも大学の学生組合に所属したり、当地の少女との恋愛に熱を上げる彼にも、自分の将来への展望が見えてこない焦躁感と名声への漠然とした憧れが生まれてくる。こうしてベルリンへと戻って来たハイムは、かの文学サークル「新クラブ」(der Neue Club)に参加し、ファン・ホッディス(Jakob van Hoddis)らとサークル主催の文学キャバレーで詩を朗読し、ついにその才能を開花させるのだが、ここでの彼の活躍ぶりを知るにつけ、一見矛盾した作風をどう解釈するべきかという疑問が生ずる。つまり、旺盛な創作活動から生み出された主人公達の多くが死んだ(『オフェーリア』„Ophelia“ 1911. などの詩)か、社会的に死んだも同然の存在(短編『狂人』„Der Irre“ 1911. など)であるのを、ただハイムの陰惨なヴィジョンの産物だと見てよいのか。これらの主人公の暗いイメージを、ハイムが文壇に登場する為の手段として選んだ技巧であると認識することは不可能だろうか。ハイムが死の前年に処女詩集を出版す

る際、出版業者として独立間もないライブツィヒのローヴォールトに再三送りつけた発刊の催促の手紙は、若い詩人の飽くことのない名声欲を感じさせるが、これはつまり「新クラブ」での活躍にも飽き足らず、あらゆる手段を講じてより高い次元へと昇りつめようとするハイムの食欲さを示すものにほかならないと思えるのである。このようなハイムが描くイメージを、ただ単に都会の暗い片隅に停まり、死者のうつろな視線を通して上空の暗雲へと注がれる空しい虚無感ととらえてしまうのは、いかにも一面的な理解ではないだろうか。人間としてのハイムの強烈な生への執着は、創作においては正反対の死という状態に昇華され、それは大都会を背景にして彼の欲して止まない永遠の生をあくまで動的に表現するという、この詩人の独自性となっているのである。

一つの詩を理解するうえでの読み手としての「努力」は意外なほどに困難である。それはある意味で作家本人の意図するものと反する解釈をも生み出しかねない。しかし詩や散文がテキストであると同様に、ハイムという作家が自分を曝け出して綴った「日記」もまた我々にとって、その詩の新たな意味を生み出し得るひとつのテキストとして読まれるべきであることはもちろん、この詩人の可能性をさらに拡充させるためには、その作品の分析に新たな理論を用いることも研究されるべきであろう。

トーマス・マン『ブッデンブローク家の人々』試論

橋本達昌

『ブッデンブローク家の人々—ある家族の没落』(Buddenbrooks—Verfall einer Familie) は、1901年にベルリンの S. フィッシャー社から出版された、トーマス・マンの最初の長編小説である。その舞台は、作者自身の故郷でもある北ドイツの長い伝統をもったハンザ同盟都市リューベックであり、描かれている時代は19世紀後半(1835—1877)である。そして副題に示されているように、その地の穀物商の一家が4代に渡って発展し、没落していく様子を描いている。この長編は1903年には10,000部を超える売れ行きとなり、この成功により、マンは文壇での地位を確立することになったのである。

出版以来、この小説に関しては膨大な評論・論文が書かれ、現在ではその評価はほぼ定着したものとなっている。つまり、大方の研究者は作者自身の作品解釈に基づいて、その小説を「芸術家とはなにか」または「相対峙する芸術家と市民との間の精神的相剋・葛藤」という主題を軸に解釈しているのである。またマンに大きな影響を与えたショーペンハウアー、ニーチェ、ヴァーグナーの哲学・芸術観と作品を関連させて論じていく。そして専ら登場人物の運命に関する哲学的・心理学的論議ばかりが活発におこなわれ、作者がほとんど関心がなかったという社会学的・政治的なものについてはあまり触れられてこなかった。しかしこの試論では、その社会学的・政治的なものに着目し、『ブッデンブローク家の人々』を取り巻く社会背景を考察し、作品がそれとどのように関わっているのかを論じていく。そうすることによって、この作品を従来とは違う観点から論じてみたい。

まず第一に、『ブッデンブローク家の人々』の中で描かれている時代と

社会に関して考察する。その19世紀後半の約40年間というのは、ドイツにとって非常に重要な時代であった。政治史的には三月革命からドイツ帝国成立といった大きな流れがあり、経済史的には産業革命期にあたる。これらの一連の歴史的事件は、小説中の出来事と時間的に精確に結びついて描かれているが、その描写はまったく間接的であり、人物達の会話の中の噂話程度にしか読者には伝わってこない。小説中で当時の大きな歴史の流れが重要視されないのは、作者の意図によるだけでなく、現実の当時のリューベック市民がそのような潮流から大きく隔たっており、市民自身が鈍い時代感覚しか持っていなかったことにも基づくと考えられる。当時のリューベックは、産業革命を促進・発達させる制度上の改革に他の地域より大きく遅れをとり、社会的・経済的に停滞しており、かつてのハンザ同盟の中心地としての面影はなかった。このような状況の中、市民の気質は経済的・政治的に保守的傾向が強まっていくのみならず、社会構造や生活様式に至るあらゆる価値観までもが、保守的で頑迷なものとなっていく。そしてこの状況は、マン自身が過ごした世紀転換期に至るまで大きく変化しなかったと考えられる。

リューベックの停滞する保守的な社会状況は、ドイツの発展の主導的役割を担ったベルリンとの比較を通じてより鮮明になる。ベルリンの産業構造の転換と技術革新は、当時の社会構造を著しく変化させていった。それに伴って多様な価値観が生まれ、ベルリンの発展とその影響をめぐって、特に文化的側面から賛否両論が持ち上がっていた。そのような価値観の多様化をもたらしたものに、当時の出版社の活動が挙げられよう。その代表的出版社 S. フィッシャー社は、革新的出版活動により、新しい文学の紹介・普及に努め、新しい読者の開拓、新しい文芸市場の開拓に大きな影響を与えた。

このような対照的狀況は、『ブッデンブローク家の人々』の受容の様子からも理解できる。リューベック以外の地域、特にベルリンにおいては、出版直後、この小説に関して多様な見解が出されたのに対して、リューベックでは、この小説を市と市民を侮辱する駄作とみなし、文学的評価はほとんどなされなかった。このリューベックの反感・不快感は、他の地域の

多彩な反応と較べると、文化状況の未成熟さの一つの表れであると見なし得る。政治的・経済的ばかりでなく、文化的にもリューベックは世紀転換期に至るまで遅れをとっていたと考えられる。

以上の考察から浮かび上がってきた19世紀後半のリューベックという都市の特性と状況から、『ブッデンプローク家の人々』を取り巻く社会背景は、政治的・経済的及び文化的に見て、停滞期にある一地方都市の伝統的価値観から抜け出せない市民社会と言えよう。一方その都市の外部では大きな歴史の流れがある。いいかえるならばその時代は、伝統的社会秩序の凋落と新しい社会の胎動が平行して進行していた時代と言える。その中でブッデンプローク家の没落を考えると、それは、刻々と変化していく時代の流れに気づかぬまま、伝統的社会秩序の中で活動し、その秩序の変化とともに滅びていく一族の物語と言えないだろうか。ブッデンプローク家の没落は、生活力の退化と芸術への志向といった従来の主人公たちの心理的变化に基づくだけでは、作者の解釈に閉ざされた、視野の狭い物語にすぎなくなるのではないだろうか。作品内部の考察に、大きな社会的変動期への視点を加えることによって、『ブッデンプローク家の人々』が、伝統と革新とが入りまじる混沌とした社会と強く結びついている作品であることが理解されるだろうと考える。